

脳神経回路が「魏志倭人伝」行路記事解釈を撃つ

「蝶の雑記帳 141」

今年の夏は、所用が多く家を空けることも重なり、また、人為によるに違いない猛暑にあえぐ果菜への水やりに疲れ、落ち着いた生活から遠かった。ひと月半に読むことができた書物はやっと一冊。二十一世紀になって社会もくたびれているのだろう、しっかりした基礎の上に時間をかけて組み立てられた議論は少なく、主張ばかりが先立つ世の中になっている。脳についての書物を読んで人間の思考法を考えてみようと思い立って、ジェルジ・ブザーキという研究者の『脳のリズム』（みすず書房、谷垣暁美訳）というレビューを読んだ。志は高かったが、この書物はむずかしすぎて専門的なところは歯が立たなかった（それでも読み通すことだけはした）。ただ、より一般的な言葉を用いる説明や解釈がカント認識論の自然科学的な解説になっている、と思った。そのことを文章にしてみるのには意味があるだろうと思っている。それとは別に、脳の海馬が内的イメージとして地図認識を獲得する仕組みを、基礎にあるニューロンのレベルから考察した部分が、わたしの脳を刺激してもう一つの関心事に引き込んだ。この「蝶の雑記帳 141」ではそれを書いてみよう。

目 次

第Ⅰ節 視点の提示 距離・方角・地図の原理	3
第Ⅱ節 考察の対象 『三国志』中の「倭国の地理」	9
(一) 倭国より北の東夷諸国の地理	12
(二) 倭国の地理	13
(三) (一) の日本語訳	15
(四) (二) の読み下し文	18
第Ⅲ節 地図の原理に則る読解	21
i. 距離と方角の大局を幾何学的な地図に描き取る	24
ii. 距離・方角・地理認識を精確な地図上に描く	34
iii. 詳細な読解 1	40
iv. 詳細な読解 2	47
第Ⅳ節 いわゆる邪馬台国近畿説は成り立たない	54
第Ⅴ節 倭国の地理に時間軸を加える議論	56
むすび	66

第 I 節 視点の提示 距離・方角・地図の原理

もう一つの関心事というのは日本古代史のことである。それも、誰もが聞いたことのある「魏志倭人伝」についてだとすれば、関心をもつ人が多いだろう（「魏志倭人伝」という書物があるのではない。中国の正史とされている「二十四史」のうちに、三世紀にあった魏・呉・蜀の三国のことを次代の晋の時代に編集した『三国志』という史書がある。三部に分かれる『三国志』の第一部「魏書」は全三十巻からなるが、そのうちの第三十巻「烏丸・鮮卑・東夷伝」の長い文章中の東夷の部分にある「倭人のことを書いた一部分」を、簡略に「魏志倭人伝」と呼んでいるのである）。

その話題に進むには、まず、大部の『脳のリズム』中のどの文章がわたしのニューロンを発火させたかを示した方がよいだろう。脳の海馬につくられる地図イメージのことは、“第 11 章” (サイクル 11) 「もう一つの皮質での振動」で考察される。

そのことについて、356 ページからの節「海馬による推測航法—地図は運動を通してつくられる」が、具体的に記述を始める。哺乳類ラットの海馬が方向や距離を認識していく活動を表現するのに、航海になぞらえて航法という言葉が選ばれている。

眼の動きによる視覚的距離推定は、それ以前の移動経験に基づくものだ。生まれつき頭の中にそういう測定基準をもっているのではないのだ。測定基準は能動的移動を

通して発達する。地図に基づく航行は、環境の表象が較正されることを必要とする。「行動のないところ、知覚なし」の格言は、航行システムにもあてはまる。

引用文は何気ないことを言っているようで、実際に人がある地域を移動するときに無意識にしていることを明らかにしている。魏の人の行路記述を歴史家が机上で軽々しく解釈することを戒めている、と考えなければいけない。

続く文章が、地表の動物が移動をくりかえしながら地図イメージをつくりあげる具体相を教える。

しかし、運動そのものだけでは、地図を形成するには不十分だ。暗い部屋の例で、通った道を横切ることも、同じ物体（ランドマーク）を異なる方向から再体现することもなく、らせん状に歩くならば、地図は形成されない。直線状を前後に動いたり、トレッドミルの上を走ったりするような1次元な移動すべてに同じことが言える。しかし、推測による探査は、本質的に、通った道がしばしば交叉するランダムウォーク型の航行だ。その結果、交叉点は複数のルートに属していることになる。ランドマークである交叉点は、位置のエラーを修正するにも、地図を組み立てるにも決定的に重要だ。いったん地図が手に入れば、ランドマーク航法はより優れた航法であり、外界をそのように神経表象できるすべての動物たちによって選択される可能性が高い。・・・地図が確立されて初めて、推測航法の代わりに、地図に基づく航法を用いることが可能になる

のだ。

人は、ラットよりも少しばかりすぐれた能力をもっている。太陽や北極星の位置から東西南北を、歩いた時間や歩数から距離をおおよそ知ることができる。そして、実際にランドマークを交叉するように通らなくても、すでに通った別の諸地点から、外界にある目立つ山の方へ延長線をひいてランドマークとして利用することができる。人は、それらの方法を用いて考えて頭のなかでイメージを組み立てて、距離と方角を推測するのに役立てることができる。そのうえ人は、そのイメージを実際に地面や紙の上に地図として描くことのできる有能な手をもっている。そうすれば、頭のなかでイメージされた地図はもっと修正できる。

このあと、『脳のリズム』は、ニューロンで観察されるさまざまなリズムと波形などの多くのグラフを示して、解説していく。空間時間的コンテクストの生理学的表象方法まで探る実験結果が示されている。しかし、残念ながらわたしにそれを受信できるニューロン系（つまり、訓練に基づいて獲得された知識）が欠けているので、理解することができない。386 ページの「現実の空間並びに記憶空間での航行」の節まで跳んで、理解できる文章に注目しよう。そこに、先ほどの引用文が言葉を換えて確認されている。

地図を形成するための前提条件は、交叉点を渡ること、つまり、同じ地点を違う方向から訪れることで、これは2次

元環境で理想的にうまくいく。したがって、地図の確立には、推測航法による探索が先立たねばならない。・・・

1次元課題では、順番のついた地点とそれらの地点どうしの距離の表象は、空間内の距離と運動の方向についての物理的距離情報をコード化することによって獲得される。

魏使の行路を1次元と見なすとしても、人は運動の速さについてラットよりは物理的に把握する能力にすぐれていると考えてよいだろうから、歩いた距離をより蓋然性高く推測することができた、としてよい。もっと言えば、距離単位が定義されていない時代から歩幅と歩数から、人は歩いた距離をおおよそ言うことができたはずである。魏の時代は、距離単位が定義されて通用するようになってから短めに考えても千年以上経っているから、魏の人はラットよりずっとすぐれた距離感覚をもっていた、と考えてよいのである。

388 ページに次のような文章が現われる。

ヒトでは、パフォーマンスがのちの自由再生によってテストされる。自由では外からの明示的な手がかりはない。思い出されたアイテムをコード化していた、その θ サイクルで、最も活発だったセルアセンブリが、次に最も強く結合されているアセンブリを「招集」する場合に、この再生が起こる。この順番は学習されたシークエンスの順番を反映している。

続いて、「意味記憶と空間地図の関係」の項に次のような文章が来る。

すでに論じたように、1次元移動における場所細胞は単一方向性受容野をもっており、それは第一に、通過された位置シーケンスによって決められる。探索中にしょっちゅう起きていることだが、航行の通り道が交叉するならば、この状況は劇的に変わる。いまや交叉点で活性化しているニューロンはさまざまな経路やエピソードに結びつけられる。このような交叉点が確立され、全方向性場所細胞が出現すると、必ず地図が出現する。それゆえ場所細胞の全方向は、ラットがある位置またはランドマークに多数の方向から近づいた証拠と考えることができる。そういうわけで、全方向性は場所細胞の多数のニューロン軌跡の一部になったことを示すものだ。そして、その場所細胞の活性化はもはや、特定のセルアセンブリの単一の時間的シーケンスに依拠してはいない。いったん確立されると、全方位場所細胞はもはや、時間的コンテキストを必要としない。全方位場所細胞は明示的な認識ユニットになる。

これらの文章を引いたのは、先にいくつか引用した文章ともども、距離と方角と地理に関するこの書物の記述は、脳のニューロンについての観察事実に基づいて書かれていること、つまり、人の距離感覚も脳の中で現実形成されている

ことを示すためである。それを歴史家が無視することは許されない。

脳の場所細胞に関する以上の自然科学的な知見が、これから始める考察が論拠とすることである。「たったそれだけのこと？」と疑問に思う人があるかもしれない。しかし、現行の日本古代史パラダイムの最重要な論点の一つ、いわゆる「魏志倭人伝」行路記事の処理を見れば、その処理法が、脳の場所細胞が行なっているほどの考察もせず、科学的な議論と言える根拠をもたないことが明らかになる。

第Ⅱ節 考察の対象 『三国志』中の「倭国の地理」

それでは、『三国志』「魏書 烏丸鮮卑東夷伝」に記述されている、倭人の国（倭国）の地理と帯方郡から倭国への行路記事の部分を読んでいこう。帯方郡は三世紀の華北の王朝「魏」が朝鮮半島の現代のソウル周辺地域に置いた行政区で、北側にもう一つ楽浪郡があった。魏は何度かその帯方郡から倭国に使節を派遣した。『脳のリズム』で使用されている言葉を用いれば、公式に訪問した魏使たちの数度の「航行」に基づいた倭国についての地理認識（帯方郡から倭国への行路や里程など）と、そのほかの（エピソード）情報は、正規の報告書などの形で保存された、と考えられる。

倭に関するそれらの報告書は、官僚国家で文書の国の魏で、中央政府の外交部署に保管されたにちがいない。次代の晋の歴史家陳寿が『三国志』を編集するとき、「烏丸鮮卑東夷伝」の巻で、倭人に関するその文書類を適宜要約した文章にまとめて倭人の条ができた、としてまず間違いない。魏の次の王朝「晋」は、後代の範例となるいわゆる禪譲の方式で、魏の政府を戦火もなくそのまま継承した。だから『三国志』は、中国の歴史書のなかでも、こと魏に関して最良の資料状況に恵まれたのである。魏にとって近くて関心の深かった地域「烏丸・鮮卑・東夷」の巻の記述はおもに政府の記録に拠るだろう、と考えてよい。そのことは、とりわけ倭人の条を読めば判る。

つけ加えれば、現在残されている書物『三国志』は注釈書の形を

している。南朝宋代の429年ころ、裴松之^{はいしゅうし}が、当時残っていた資料を集めてたくさん（場合によっては本文を上回るほど）の註釈をつけた。その書物を12世紀に木版本にしたものが現在流通している『三国志』である。裴松之は、原文の正確さを吟味する史料批判の方法論をもって註釈を加えたと評されているから、この点でも註釈つき『三国志』の価値は高い。

裴松之の註釈でたくさん引用されているのは、魏の時代に完成していた二つの史書『魏書』と『魏略』である（『魏書』は255年ころ王沈によって、『魏略』は265年以前に魚豢^{ぎょかん}によって編纂されたとされている）。両書は後世散逸して、今では『三国志』の註からしか知ることができないが、ともに魏王朝の時代に編集されたから、貴重な同時代史である。陳寿の『三国志』の記述は簡潔なものだが、魏政府の文書類に依拠してだけでなく、同時代書と言える『魏書』と『魏略』をも参照している可能性は大きいだろう。こういうわけで、現在われわれが読む注釈つき『三国志』は史料価値の高い史書の一つである。

日本の歴史家が学術書でないところなどで、『三国志』や南朝の史書の地理記述は誇大であるなどと批評して、中国史書をひとくくりに軽視する態度を示すのは、学者の態度として感心しない。同時代史の性格をもつ注釈つき『三国志』はむしろ中国史書のなかでも最も信頼に足る史書と言えるのである。

ただし、近い時代の歴史を書くので、執筆当時や前代の権力者や親族の正統性や体面や利害関係にかかわることを書けば迫害を受

ける恐れがあるから、それに触れないか内容を変更した可能性はある。しかし、国外の北東地域や朝鮮半島や倭国のことについて、そういう恐れはほとんど生じない。烏丸や鮮卑や東夷そして倭国の記述をぞんざいにして不正確にする理由はない。むしろ、その地域の精確な情報を得ようとしていたことを、陳寿が書いている。

『三国志』「魏書 烏丸鮮卑東夷伝」のうち倭国までの移動経路など地理を記述した部分の全部を、関係するエピソード情報なども含めて以下に示す。日本の多くの史家は「倭人は・・・」から始まる倭人の条にしか注目しないが、東夷の国々の記述部分にも、「倭国の地理」に関係する箇所がある。それらは「倭国の地理」を読み取るのに大いに参考になるから、それも示そう。「東夷伝」の記述順にすれば、そちらを先に示すことになる。

漢文は慣れないとむずかしいが、文法の基本は主語・動詞・目的語の順であることを知って読めば、行路記事の構文はおおよそ理解することができる。ただ、前置詞や助詞の多い日本語ほど語の関係を教えず、修飾語がどの語を修飾しているかが紛らわしく、切れ切れな漢字単位の結びつきが見通しにくい。関係代名詞がないことも複合文の分解を困難にする。また、古代の書記法では、句読点で分節することがなく、一連の文章を明確な段落に分けることも行われなかった。こういう漢文の特徴から異なる解釈が生じることになる。

以下に示す原文は、電子化された Wikipedia(維基文庫)の「二十四史」から切り取ったものである。その電子化された

文章は、見てのとおり、句読点が挿入されている。文節の区切りが入れられているのである。その区切り方に異論が出るかもしれない。わたしは、その区切り方が地理記述に関する文章に大きな誤りをもたらすことはない、と判断した。

(一) 倭国より北の東夷諸国の地理

倭国以外の部分は、倭国の部分を読むのに参考になるところだけを簡条書きする。国名もしくは地域名を[]でくくる。

[夫餘] 在長城之北，去玄菟千里，南與高句麗，東與挹婁，西與鮮卑接，北有弱水，方可二千里。戸八萬，・・・

[高句麗] 在遼東之東千里，南與朝鮮，濊貊，東與沃沮，北與夫餘接。都於丸都之下，方可二千里，戸三萬。・・・

[韓] 在帶方之南，東西以海為限，南與倭接，方可四千里。有三種，一曰[馬韓]，二曰[辰韓]，三曰[弁韓]。辰韓者，古之辰國也。

[馬韓] 在西。・・・（55 の国名が記され），凡五十餘國。大國萬餘家，小國數千家，總十餘萬戸。辰王治月支國。

註としてほかの史書の文が挿入されたあとに、歴史的な出来事が記述される。

・・・是後倭韓遂屬帶方。（魏の）景初中，明帝密遣帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣 越海 定二郡，・・・

このあとは辰韓と弁辰の記述が続くから、一番大きな地域だった[馬韓]のことは上の五十余国のところに記述した、と考えているのだ。

【辰韓】在馬韓之東，其耆老傳世，自言古之亡人避秦役來適韓國，馬韓割其東界地與之。・・・始有六國，稍分為十二國。

次に弁辰とあるが、まず弁韓のことを言い、辰韓のことも合わせて述べる。

【弁辰】亦十二國，又有諸小別邑，・・・，（国名の羅列）。弁、辰韓合二十四國，大國四五千家，小國六七百家，總四五萬戶。其十二國屬辰王。辰王常用馬韓人作之，世世相繼。辰王不得自立為王。

註のあとに次の文がある。

弁辰與辰韓雜居，亦有城郭。衣服居處與辰韓同。言語法俗相似，祠祭鬼神有異，施灶皆在戶西。其瀆盧國（弁辰の項に羅列されていた国）與倭接界。十二國亦有王，・・・

【辰韓】と【弁辰】の部分からすると、辰韓の12国は辰王に属し、弁韓の12国にはそれぞれ王がいたと考えられる。この文章には、弁辰24国のうちの一国「瀆盧國」が「倭」と境界を接しているという地理上重大なことが書かれている。

（二） 倭国の地理

こんどは、倭国の条の地理に関係する全文を示そう。文章

を追いやすくするために、上でもしたように、距離・方角・地理などの地図情報の部分を赤字で示し、それに関係する情報を青や緑の文字にする。また、行路のつながりを示す部分を下線でつなぐ。見づらくなるのを我慢してください。

倭人在帶方東南大海之中，依山島為國邑。舊百餘國，漢時有朝見者，今使譯所通三十國。從郡至倭⁽¹⁾，循海岸水行，歷韓國，乍南乍東，到其北岸狗邪韓國，七千餘里，始度一海，千餘里至對馬國。其大官曰卑狗，副曰卑奴母離。所居絕島，方可四百餘里，土地山險，多深林，道路如禽鹿徑。有千餘戶，無良田，食海物自活，乖船南北市糴。又南渡一海千餘里，名曰瀚海，至一大國，官亦曰卑狗，副曰卑奴母離。方可三百里，多竹木叢林，有三千許家，差有田地，耕田猶不足食，亦南北市糴。又渡一海，千餘里至末盧國，有四千餘戶，濱山海居，草木茂盛，行不見前人。好捕魚鰓，水無深淺，皆沈沒取之。東南陸行五百里，到伊都國，官曰爾支，副曰泄謨觚、柄渠觚。有千餘戶，世有王，皆統屬女王國，郡使往來常所駐。東南至奴國百里，官曰咒馬觚，副曰卑奴母離，有二萬餘戶。東行至不彌國百里，官曰多模，副曰卑奴母離，有千餘家。南至投馬國，水行二十日，官曰彌彌，副曰彌彌那利，可五萬餘戶。南至邪馬壹國，女王之所都，水行十日，陸行一月⁽²⁾。官有伊支馬，次曰彌馬升，次曰彌馬獲支，次曰奴佳靺，可七萬餘戶。自女王國以北，其戶數道里可得略載，其餘旁國遠絕，不可得詳。次有斯馬國，次有已百支國，次有伊邪國，次有都支國，

次有彌奴國，次有好古都國，次有不呼國，次有姐奴國，次有對蘇國，次有蘇奴國，次有呼邑國，次有華奴蘇奴國，次有鬼國，次有為吾國，次有鬼奴國，次有邪馬國，次有躬臣國，次有巴利國，次有支惟國，次有烏奴國，次有奴國，此女王境界所盡。其南有狗奴國，男子為王，其官有狗古智卑狗，不屬女王。自郡至女王國萬二千餘里^(ハ)。

この間、省略。

女王國東渡海千餘里，復有國，皆倭種。又有侏儒國在其南，人長三四尺，去女王四千餘里。又有裸國、黑齒國復在其東南，船行一年可至。參問倭地，絕在海中洲島之上，或絕或連，周旋可五千餘里^(ニ)。

この維基文庫は版本「紹興本」を底本としたのだろうか、版本「紹熙本」が「対海國」とする箇所を「対馬國」と書いている。ただし、この異同は地理の読解に影響を及ぼさない。

(三) (一) の日本語訳

今度は、上の漢文を日本語にして読もう。(一) に対しては、ちくま学芸文庫『正史 三国志 4』(今鷹真・小南一郎訳)による現代日本語訳を示す。

夫余は長城の北におり、**玄菟郡から一千里の距離**にあつて、**南は高句麗と**、**東は挹婁と**、**西は鮮卑と接し**、**北には弱水**

があって、その**範囲は**ほぼ**二千里**、**戸数は**八万、・・・

高句麗は、**遼東郡の東一千里**にあって、**南は朝鮮・濊貊と**、**東は沃沮と**、**北は夫余と接している**。丸都山のふもとに都を置き、その**領域は二千里ばかり**、**戸数は三万**。・・・

韓は、**帶方郡の南**にあり、**東西は海で限られ**、**南は倭と境を接して**、**その広さは縦横四千里ばかり**である。三つの種族があって、一つは**馬韓**、二つめは**辰韓**、三つ目は**弁韓**である。**辰韓**というのは、^{いにしえ}古の辰国である。

馬韓は三韓のうちの西部に位置する。・・・（55の国名が記され）、全部で五十余国がある。**大きな国は一万余家**、**小さな国は数千家**で、全部あわせると**十余万戸**になる。**辰王は月支国にその宮廷を置いている**。

註としてほかの史書が挿入されたあとの文は、

・・・これ以後、**倭と韓とは帶方郡の支配を受けることになった**。（魏の）景初年間（二三七～二三九）、明帝は**帶方太守に任じた劉昕と**、**楽浪太守に任じた鮮于嗣とを遣り**、**秘密裏に海からそれぞれの郡に入って郡を平定させた**。・・・

（この文は、魏が司馬懿^いを総大将として遼東地域と朝鮮半島北部を征服した時、先駆けて黄海を渡った一隊が朝鮮半島を奇襲して楽浪郡と帶方郡を攻略したことを語っている。倭国が征服されたばかりの帶方郡に使いを派遣したのは、この時のこと）。

辰韓は、**馬韓の東方に位置する**。その地の古老たちが代々いい

伝えるところでは、自分たちは^{いにしえ}古の逃亡者の子孫で、秦の労役をのがれて韓の国へやって来たとき、馬韓がその東部の土地を割いて与えてくれたのだ、・・・もともと六国であったが、だんだんに分かれて十二国になった。

弁辰も十二国からなり、さらにいくつかの地方的な小さな中心地があって、・・・、(国名の羅列)。弁韓と辰韓とで合わせて二十四国、大きな国は四、五千家からなり、小さな国は六、七百家からなって、あわせて四、五万戸がある。そのうちの十二国は辰王に属している。辰王の王位は、かつて馬韓の者が即くことになって以来、代々ずっとそのまま来た。辰王の位は、[馬韓にかぎられていて、辰韓のものが]自ら王位に即くことはできない。

註をはさんで続く文は、

弁辰は、辰韓の者と住む場所が入りくんでおり、彼らも居住地のまわりに城郭を作る。衣服や住居は辰韓と同じで、言語や掟も似ているが、鬼神の祭祀に違いがあり、かまどはみな家の西側に置かれる。弁辰のうちの瀆盧國は、倭と境界を接している。十二の国には、さらにそれぞれに王がいる。・・・

(辰韓には王がいるのだから、この項で「弁辰」と書かれているのは弁韓のことだ、と思われる)。

(四) (二) の読み下し文

(二) に対しては、岩波文庫の『魏志倭人伝』（石原道弘編訳）による読み下し文を示す。『三国志』原文の当該箇所と適宜対照させて読めば、原文の記述の仕方の詳細も見えるはずである。岩波文庫版『魏志倭人伝』は、日本語で註をほどこすために、原文にはない改行を行なっている。

岩波文庫版は、異なる版本から校訂した「百衲本」の原文を撮影し印刷しているが、その原文は「対海國」となっているのに、訳文では「対馬国」としている。

倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて国邑をなす。旧^{もと}百余国。漢の時朝見する者あり、今、使訳通ずる所三十国。/

郡より倭に至るには、海岸^{したが}に循^{したが}って水行し、韓国^へを歴て、
^{あるい}乍^{あるい}は南し乍^{あるい}は東し、その北岸^{わた}狗邪韓国に到る七千余里。始めて一海^{わた}を渡る千余里、対馬国に至る。その大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居る所絶島、方四百余里ばかり、土地は山険しく、深林多く、道路は禽鹿^{みち}の径のごとし。千余戸あり。良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴^{してき}す。また南^に一海を渡る千余里、名づけて瀚海という。一大国に至る。官をまた卑狗といい、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木・叢林多く、三千ばかりの家あり。やや田地あり、田を耕せどもなお食するに足らず、また南北に市糴す。

また一海を渡る千余里、末盧国に至る。四千余戸あり。山海に^そ浜うて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。^{この}好んで魚鰔を捕らえ、水 深淺となく、皆沈没してこれを取る。東南 陸行五百里にして、伊都国に到る。官を爾支といい、副を泄謨觚・柄渠觚という。千余戸あり。世々王あるも、皆女王国に統属す。郡使の往來(するに)常に^{とど}駐まる所なり。東南 奴国に至る百里。官を兕馬觚といい、副を卑奴母離という。二万余戸あり。東行 不弥国に至る百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。千余家あり。

南、投馬国に至る水行二十日。官を曰弥弥といい、副を弥弥那利という。五万余戸ばかり。南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。官に伊支馬あり、次を弥馬升といい、次を弥馬獲支といい、次を奴佳鞮という。七万余戸ばかり。/女王国より以北、その戸数道里は得て略載すべきも、その余の旁国は遠絶^{つまびら}にして得て 詳 かにすべからず。

次に斯馬国あり、・・・この間省略、次に烏奴国あり、次に奴国あり。これ女王(国)の境界の尽くる所なり。

その南に狗奴国あり。男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属せず。郡より女王国に至る万二千余里。/

女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆 倭種なり。また侏儒国あり、その南に在り。人の長 ^{たけ} 三、四尺、女王(国)を去る四千余里。また裸国・黒齒国あり、またその東南にあり。船行一年にして至るべし。倭の地を参問するに、海中洲

島の上に絶在し、あるいは絶えあるいは連なり、周旋(すると)
五千余里ばかり。 /

(四) の文中に入れた赤字の記号「/」は、ちくま学芸文庫『正史 三国志 4』の段落の区切り方を示している。段落の区切り方が、岩波文庫版『魏志倭人伝』とちくま学芸文庫『正史 三国志 4』とで異なることが判る。先に注意を促したように、古代の漢文の表記法が読み取りに異同を生じさせているのである。現代風に段落を分けるときのちがいは、読解にとって大したことではないと思われるかもしれない。しかし、小説のような創作文でない史書では、文章全体の構成にかかわる段落の分け方はおろそかにできない。全体の文脈の把握がそれによって影響を受ける可能性がある。次の節でこの点が問題になるだろう。上の読み下し文で()でくくった小さな文字の部分は、わたしが個々の語句に加えた補足である。文体の趣味にかかわることだが、文の解釈には影響を及ぼさないはずである。

第Ⅲ節 地図の原理に則る読解

最初に、「距離・方角・地図の原理」を基礎から復習する必要がある。いわゆる“邪馬台国”論争が起きたのは、その原理をおろそかにしたからである。「『三国志』は帯方郡から女王国までの距離が 12000 里などと途方もない数字を挙げる、『三国志』の距離は信用できない」と通説を奉じる人が言うのを聞くが、その人たちは距離の原理を見誤っている。距離は、長さの単位となる原器をつくり、ある地点から別の地点までその原器の何倍あるかで測る。その方法で本質的なのは「相対比」であって「単位の長さ」ではない。その証拠に、日常使う地図はいくつもの縮尺で描かれているが、たいていの人はその縮尺に無頓着である。それで問題が起こらないからである。地図は、さまざまな地点間の距離の相対比を幾何学的に描くものなのだ。言葉で説明するときも原理的に同じである。もしその相対比が不正確なら、方角も不正確になる。

地理を言葉で表現するのは意外にむずかしい。人がある土地の地理をよく知らない人に話して聞かせる場面を考えてみよう。対面しているときには、地面か紙に地図を描きながら説明するのが最もよい方法である。それと比較して電話で説明する場合には、その土地の地理イメージをもたない人に伝えるのが簡単ではないことを誰もが経験的に知っている。そのように日常生活を反省してみれば、「距離・方角・地図

の原理」の重要さが判る。

街に出て人に道を尋ねる場合を考えてみると、地理の伝え方にもう一つのやり方があることに気づく。道を尋ねられたら、「この道の先に目立つ建物がありますね、あそこの角を右に曲がって行くとしばらくしてコンビニがあります、その角をこんどは左に曲がってください、…」などと教える。このやり方は、碁盤の目のように道の通っている京都のようなところでうまくいく。こちらは、対面する二人が粗く描くユークリッド幾何学的な地図による説明とは少し異なり、デカルトが開発した代数幾何学の方法と言える。しかし、デカルト座標を用いる代数幾何学はユークリッド幾何学と等価で、現代の地図はその両方の長所を合わせもつ。

術学的な話をして申しわけないけれども、これは、「距離・方角・地図の原理」をよく理解するのに役立つ。第Ⅰ節で『脳のリズム』の一部を引用したが、脳では、微細なニューロン(神経細胞)のシステムが、「距離・方角・地図」を把握する機能を担っている。文中に「場所細胞」という言葉が出た。ひどく単純化すると、たくさんの小さな「場所細胞」が網目をなしてデカルト座標の役割をして働き、そこから幾何学的な地図イメージを構成する、と比喩的に言うことができる。「距離・方角・地図の原理」は、生物としてのラットやヒトの脳と全身に張り巡らされた神経系に基礎をもつのである。人は、生物として授かっている能力によって、たくさんの場所細胞による代数幾何学的な地理の表現から、すぐれた視力を体の

移動感覚と結びつけ、さらにすぐれた推理能力によって、幾何学的な地図を描くことができるのである。

ついでに言えば、精確な地図を作成することができるようになったのは、三角測量法が開発されてからである。三角測量法は、隔たりの距離を測量できる二点のそれぞれから、目印のある地点を見通し方角を測って三角形を形作り、その三角形と相似な三角形を紙の上に描いて、二つの三角形の三辺の長さの相対比から、目印の目標物までの距離を測る方法である。この方法で遠くの山の高さも測ることができる（シャーロック・ホームズもそのやり方で高い木の高さを推定した）。

Wikipedia によれば、——古代中国には『九章算術』という数学書があった。263 年に魏の劉徽^{りゅうき}という人がその注釈書をつくり、『海島算経』という補遺も著した。そこに書かれた測量関連の問題と解法は、同時代の人々にも知られていたようで、裴秀^{はいしゅう}という人が、当時の製図・測量・数学について概説している。その中で裴秀は地形図上で正確に距離を求めるために格子状に位置を示す方法を記している——という。デカルト座標上に地図を描くことが知られていたのである。『三国志』「倭人の条」の書き方だけからでは、その方法が魏使や陳寿に知られていたか判定はむずかしい。しかし、『脳のリズム』が説くように、人は本能的な体感で、荒っぽい三角測量法のような仕方地図イメージを思い浮かべることができるのである。

準備が長くなったが、以上のことをおさえておくことは、『三国志』に文字で記述されている「倭国の地理」を正しく理解するのに決定的に重要であることが、次の二つの小節 i と ii で明らかになるだろう。

それでは、上で提示した「距離・方角・地図の原理」に則って、IIに示した考察の対象『三国志』中の「倭国の地理」を読み解いていこう。

i. 距離と方角の大局を幾何学的な地図に描き取る

その場合、『三国志』は正しく地理を記述しようとしていると前提することが必要である。初めから『三国志』の距離や方角は信用できないとするなら、『三国志』の記述から倭国の位置を推定しようとするアプローチ自体が意味をもたない。言うまでもなく、“邪馬台国”や「女王国」という言葉さえない『三国志』以外の資料から倭国がどこにあったか推測する方法などない。

われわれが採ることのできる最良の方法は、『三国志』が記す女王国へ至る行路記述を順に、言語上厳密に読解しそれを地図に表現していった、出来上がった地図が幾何学上合理的か、つまりより厳密な数学的な論理にかなっているかを検討することである。もし途中の細部の記述に不明確でまぎれが生じかねない部分があるならその部分ははずしてでも、得られた地図が矛盾なく合理的に一定の地理を表現していて、関係する諸記述とよく適合するなら、それを倭国の大局的な

地図だとしてよいのである。それ以上良質な地図を得る方法はない。もしそういう地図が得られないなら、そのときはじめて『三国志』の記述する地理を疑えばよいのである。

(四) すなわち (二) から倭国の地理記述を抜き出して、箇条書きにしていこう。

ア. 倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて国邑をなす。

イ. 郡より倭に至るには^(イ)、海岸に^{したが}循^てって水行し、韓国を^へ歴^て、^{あるい}乍^{あるい}は南し^{あるい}乍^{あるい}は東し、その北岸狗邪韓国に到る七千余里。

ウ. 始めて一海^{わた}を渡る千余里、対馬国に至る。…方^{わた}四百余里ばかり。…南北に市^{してき}糴す。

エ. また南(に)一海を渡る千余里、…一大国に至る。方三百里ばかり。…また南北に市糴す。

オ. また一海を渡る千余里、末盧国に至る。

カ. 東南陸行五百里にして、伊都国に到る。

キ. 東南 奴国に至る百里。

ク. 東行 不弥国に至る百里。

ケ. 南、投馬国に至る水行二十日。

コ. 南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日
陸行一月。

サ. つまびらかにすることができないとされる諸国。

シ. その南に狗奴国あり。…女王に属せず。

ス。郡より女王国に至る万二千余里^(ロ)。

セ。女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり。

ソ。また侏儒国あり、その南に在り。人の長^{たけ} 三、四尺、女王(国)を去る四千余里。また裸国・黒齒国あり、またその東南にあり。船行一年にして至るべし。

タ。倭の地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、あるいは絶えあるいは連なり、周旋(すると)五千余里ばかり。

以上の文字記述を正しく読み取って、人の脳のなかにある地理把握能力を発揮して、白紙上に地図を描き出すのが「倭国の地理」を理解しようとする者の最初になすべき重要な作業である。

アからオまでは、語句の記述にまぎれがなく明確な文節からなる。さらに文脈まで読みとろう。スペースを取るようになるが、慎重な文脈理解は欠かせない。

ア。倭人の国々が、大局的に、帯方郡の東南方面にある大海中の山がちな島(々)にある、と概括している。

イ。帯方郡から倭に至る道筋のうち、前半の「韓」の地域について概説している。(一)の[韓]のところで「南は倭と接す」、[弁辰]のところで「倭と界を接す」と二度書かれているから、韓から(おそらく弁韓地域に接してあった)倭地に到ったことを述べている、と読解することができる。「その北岸狗邪韓国」は、「倭国の北岸」の

「狗邪韓国」を意味するだろう。

ここには、海岸に沿っていく「水行」と韓国内の「陸行」とが書かれていて、魏使の一行のうちの一隊が陸地を進んだことを示唆している。事実、(二)には、ウの対馬国のところで「土地は山険しく、深林多く、道路は禽鹿の径のごとし」、エの一大国のところで、「竹木・叢林多く」、オのところで「草木茂盛し、行くに前人を見ず」と書かれていて、魏使の一行中の一隊は、倭地に入っても陸行したことが書かれている。だから、魏使一行中の一隊は、韓でも倭でも陸地を進んだと考えるのがよいだろう。陳寿の序文が「…東夷」の国々の情報を得ることが重要だったと書いていることからしても、魏人は、実際に陸地を探査しながら進んだ、と考えてよい。

すると、コ文「南、邪馬壹国に至る、…、水行十日、陸行一月」がイ文と無関係だとすることはむずかしい。帯方郡から狗邪韓国まで進む陸行は、「南に進んだり東に進んだりして 7000 里」と書かれている。7000 里は、縦横 4000 里の(正)方形の縦横の和 8000 里よりも短い、対角線 $4000 \times \sqrt{2} \approx 5600$ 里よりもかなり長い。道は地形によって曲げられるが、西南の隅から対角部よりも西の海岸に向かえば距離が減ってしまう。七千余里という大きな数字は、ほぼ対角線方向に進んだ蓋然性が高いことを表現している。北岸狗邪韓国は(正)方形の対角部の地域で海沿いにあることになるだろう。

ウ。イに続く文ウは、倭地である「狗邪韓国」から 1000 里ほど海を渡ると対馬国に至る、と言っている。先頭の文には進む方向が書かれていないが、うしろにある「南北に市^{してき}羅す」が、狗邪韓国・対馬国・一大国が北から南の方向に並ぶことを教える。「北^{してき}岸狗邪韓国」という語句はそれに対応する。「南北に市^{してき}羅す」の語句はエでも使われていて、それと合わせて読めば、大局的に、狗邪韓国・対馬国・一大国・末盧国が北から南の方向に並ぶことを示している。

エ。そのことを、「対馬国から南に 1000 里ほど海を渡ると一大国に至る」という文が、確認している。

オ。エで一大国について「南北に市羅す」という文が、「海を 1000 里ほど渡ったところにある末盧国」は一大国の南の方向にあることを指摘する。

こうしてアからオまでの文は、一貫してつじつまのあう文脈を構成している。それを疑う余地はない。

カ～コの文に対してはいろいろ異なる解釈が提出されているから、あとまわしにしよう。この第 i 小節では、地図に描かないないことにする。

サ。には、つまびらかにすることができないとされる諸国が記されている。それら二十一諸国は名があげられているから、アのすぐうしろに書かれている「今 使訳を通とこ

ろの三十国」に含まれるだろう。しかしこの第 i 小節では、やはり地図に描き出さない。

- シ. 女王国に属さない「狗奴国」という国が記されている。女王国に属するだろうサの諸国のすぐうしろに、「その南」にあると書かれているから、女王国の領分の南側に王のいる敵対国があるのだ。あとのほうの文章に、女王国と戦争状態にあり、帯方郡から魏の軍旗と檄文を携えた魏使が来るほどだから、強力な国で、相当の広さがあると考えなければならない。
- ス. 帯方郡から女王国に至る総里程が、12000 里と明確に記されている。

セ. あいだにほかのことをかなり記したあとに、女王国～倭国の外のことが書かれている。「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり」とする記述を、「海を千余里渡ったところにある陸地に女王国がある」と読みとる人はいないだろう。この文は、「女王国の東へ海を渡ったその陸地が女王国に属さないこと、ただしその住民は倭人と同種である」ことを言っているのだ。従って、女王国はその陸地の西にある。これは自明の論理である。“邪馬台国”が上陸した末盧国のある島から海を渡りさらに長い距離を行く奈良盆地にあるとする説は、この文を消し去らなければ成立しがたい。セは倭国の周辺を概略的に記述しようとしているのだが、女王国の東の陸地の境界は定かでないので、あとで示す

地図では仮に点線で描いてみよう（「Y」の記号を添える）。ソ.には、記される国の一つが侏儒国と呼ばれ、住民の身長が特別低いとされる。あと二つの国の方は、船で行って一年もかかる場所にあるとされる。これらは伝聞を記したものでしょうから、精確さが望まれる地図には描くまい。

タ.の文は、倭国の地理を別の言葉で表現して、その広さをめぐりめぐって 5000 里と総括する。倭国の地理を大局的に表現するしめくくりの文だから、それを軽視してはいけない。

* * *

さて、『三国志』の「倭国の地理」を記述するアからタまでの文章を追って総括にまでたどり着いたから、われわれもここで、倭国の地理の概要を整理してみよう。1000 里以上の長い距離に注目してみれば、概要が見えてくるはずである。順に番号づけて要約すると次ようになる。

- ①：縦横ほぼ 4000 里の韓国内を南東（おそらく対角方向）にジグザグの道を 7000 里行くと、倭地の北方の地「狗邪韓国」に到る。
- ②：狗邪韓国から南の方向に三度、そのつど海を 1000 里ほど渡る（「狗邪韓国」→「対馬国」→「一大国」）と、末盧国に至る。その合計の里程は 3000 里である。
- ③：帯方郡から女王国に至る総里程は 12000 里である。
- ④：①～③からすると、女王国～倭国は、12000 里－7000 里

≈5000 里の範囲にあることになる。倭国の地理の総括文
 々は、そのことを明示して確認している。

『三国志』の記述では概数であることを示すために「余」という文字が使用されている。しかし、現代の表記法では、距離が有効数字一桁の概数で記述されていることを知っていれば、「余」を必ずしも必要としない。

北方の地「狗邪韓国」から「末盧国」までの4国については、その地理はまぎれなく記述されている。しかし、カ・キ・ク・コの記述する4国（伊都国・奴国・不弥国・邪馬壹国）については、この小節 i の段階では不明としておく。そうしても、そこに書かれている距離は、500 里や2つの 100 里で、その細部を無視しても、倭国の地理の概要が大きく変更されることはないだろう。

ケの記述する投馬国も、倭国の南にあるとされる狗奴国も、今の段階では言及しないことにする。カ・キ・ク・ケ・コ・サ・シの記述に関する問題は、この小節 i で描こうとする倭国の概要地図では十分議論することはできない。この段階で描く地図では、邪馬壹国などを含む島の大きさは不明ということになる（記号「X」を添えておく）。

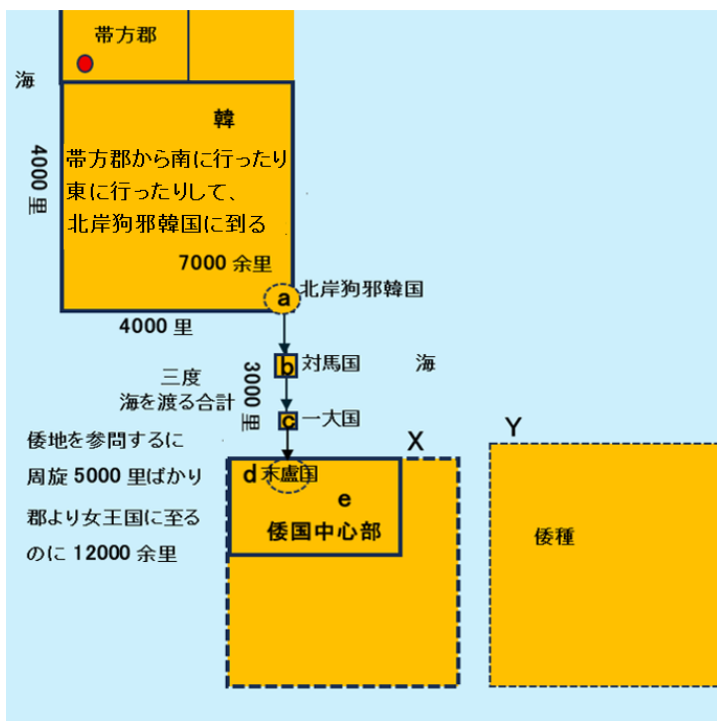
細部について検討が可能になるのは、もっと精密で具体的な地図が得られてからのことである。その問題は、次の小節 ii で検討しよう。

以上の論述が長くなったのは、できるだけ正確を期そうとしたからである。それではいよいよ、「倭国の地理」の骨格①・②・③・④を、白紙上に図形で描いてみよう（陸地を黄色、まわりの海を薄い青色で）。すでに述べたように、距離の原理の基本は、距離を単位長さを基準にして相対比で表わすことにある。アからタの文に現われる里単位で表記された距離数の比を保つように、それぞれの陸地を図面に描こう。距離数は一桁の概数で表記されているのだが、その数字を尊重し、方角も東西南北の表記を尊重して描く。そうして得られたのが地図Ⅰである。『三国志』には末盧国で上陸した陸地Ⅹの広さや地形が書かれていないので、倭国中心部を描くのに困って大雑把なものになった。陸地のあることしか書かれていないⅪはもっと雑なものになっている。予断をもちこまないようにするつもりだったのに、出来上がった図を見ると、『三国志』の倭国と女王国についてのかかなりの量の興味深い記述に誘われて、わずかに予断の入った地図になっているかもしれない。しかし、それが倭国の地理の読み取りをゆがめるほどではないことが、あとで知られる。

地図Ⅰは、それぞれの部分が幾何学的にすなわち数学的に厳密な関係を構成して、地理の骨格を明解に示している。それが意味するのは、『三国志』の地理記述は本質的な矛盾を含まず、朝鮮半島と島々から成る倭国の地理を基本的に正しく記述している、ということである。上で述べたように、

陸地 X・Y と倭国中心部 e の広さや形は仮のものだが、韓半島・海峡部 (a・b・c・d) ・倭国中心部 (X と e) が構成する幾何学的な関係が大きく変更されることはない。概略地図Ⅰに根本的な疑念の生じる余地はない。

概要地図Ⅰから確実に言えることがある。魏の時代の倭国は a、b、c、d と中心部 e から成り、a→b→c→d→e と巡ると



地図Ⅰ・『三国志』が言葉で描く倭国の地図

その距離がおおよそ 5000 里であり、女王卑弥呼のいる邪馬壹国は陸地 X 内にある、ということである。どんな学者もこれを否定することはできない。

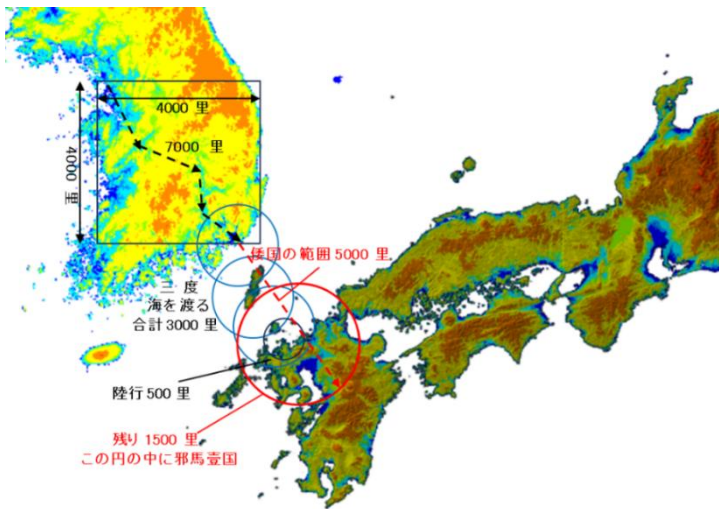
この概略地図は、この段階では採り上げないとした伊都国や奴国や不弥国に言及することを可能にする。これら三国は女王国への途上にあるのだから、女王国と同じく中心部 e にあるという理屈になる。投馬国と女王国に敵対する狗奴国については、ケとシの文を吟味していないここでは、用心して言及することを控えよう。

ii. 距離・方角・地理認識を精確な地図上に描く

地図 I でもっと言及することは可能だけれども、焦ってはことを仕損じる。確実な方法で王道を進まなければならない。

何度か倭国に行った魏使たちは、女王国までの行路を何度も往復した。『脳のリズム』が説くように、その移動中に方向の異なる交叉点を通ったこともあるだろう。それに人間は、ラットよりも相当すぐれた地図イメージを獲得する能力がある。魏使はその能力を発揮して報告書を書いたはずである。ところが、『三国志』を編集した陳寿は倭国の地理に不案内で、正確な地理を読み取れなかった個所もあっただろう。それでも陳寿は、自分の地理把握能力を発揮して、魏使の報告書に書いてあった地理を地図 I に復元できるほどの情報を留めえたのである。

さて、現代のわれわれは、古代人よりもはるかにすぐれた地図をもっている。その現実の地図に『三国志』の言葉が描く地図Ⅰを入れ込めば、次に示す地図Ⅱのようになる。地図Ⅱを用いれば、『三国志』に記述されている倭国の地理を、精確に読み取ることが可能である。



地図Ⅱ □帯方郡から倭国までの距離と女王国の範囲

現実の陸地は単純な方形ではないから、地図Ⅱは地図Ⅰよりも複雑である。それでも地図Ⅰは、海峡部の韓半島東南端・対馬・壱岐・壱岐に近い松浦半島の並びが北－南の直線方向から少し傾いているのを大目に見れば、意外なほど基本構図が現実の地理を表わす地図Ⅱに似ている。自然の地理がそう

なるような特徴をもっていたからだと言えればそれまでだが、
ともかく、地図Ⅰは現実の地理をよく再現していたのである。

現代の精密な地図を手元において、文字で書かれた地理記述をそれと対照させて考えれば、地理だけでなく地理に関係することまで含めた記述内容についてもっと踏み込んで議論することができる。地図Ⅱは、インターネット上に公開されている国土地理院の地形図をパソコンの画面に出して作成したものである。さまざまな描き方の地図が出せる。それを拡大すれば注目する小地域の詳細な地形やランドマークそのほかの位置と地名を知ることができる。

地図Ⅰを描くときには、オ～シまでの地理記述を採り上げなかったけれど、地図Ⅱでは、留保していたカ¹の文に現われる伊都国の位置が考慮されている。カ¹の文は、末盧国から伊都国に到る行程を「東南陸行五百里にして、伊都国に到る」と表現する。『三国志』の書く「方角」が信用できないという人が最初に挙げるのがこの文である。方角と距離を考えるのに便利な Google map で、慎重に調べてみよう。

地図Ⅰでは、1000 里以上の長い距離を問題にしたから、距離の原理で大事な相対比だけを考えればよかった。しかし、末盧国から伊都国に到る行路のように小地域の地理を考察するときには、それでは済まない。現代の詳細な地図と比較するならなおさら、『三国志』の用いる里単位が現代の単位で何 m になるかを知る必要がある。

それを調べる前に、念には念を入れて次のことを確認しておこう。『三国志』の書く距離は信用ならないと言う人があるが、どんな根拠があってそう言うのだろうか。インターネットでその根拠を挙げた文献を探してみたが見つからない。いわゆる AI は決して人間に及ばないと思うけれども仕方がないので、Google chrome が最近提供している AI の示す概要を引用しよう。この AI は、普通の人間ができないほどの数の文献を検索して該当する記述を提示するはずだから、根拠を挙げた文献がもしあるならその内容を示すだろう。

「魏志倭人伝」の距離が信用できないとされる具体的な根拠として次の諸点が挙げられて、これらの要因が複合的に作用することで、「魏志倭人伝」の記述する距離が歴史的な文脈において、信頼性が低いと指摘されている、とする。

i 伝聞情報と不正確さ：「魏志倭人伝」は、魏の使者が直接倭国を訪れたわけではなく、倭国から来た使者や他の情報源からの伝聞に基づいて書かれたため、情報の正確性には限界があります。

ii 当時の技術的な限界：現代のような精度の高い地図や測量技術は当時存在しませんでした。

iii 記録の過程での誤記・変造：『魏志倭人伝』は三国志という歴史書のなかの記述であり、現存するものは複数回の写本を経ており、その過程で誤記が生まれ、内容が変造された可能性も否定できません。

iv 「里」の単位の曖昧さ：当時の「里」の具体的な長さは、時代や地域、測量方法によって異なり、現代の感覚で換算すると大きな誤差が生じる可能性があります。

v 方角の表記のずれ：例えば、末廬国から伊都国への移動距離の記述では、中心地を唐津と前原で比較すると、実際の東南方向と70度近く方角がずれているという指摘もあります。

この文はAIの頼りなさを露呈している。iは、波線を引いた箇所、「魏の使者が倭国に行かなかった」と書く信用できない文献を拾っている。iiも、魏の時代に三角測量法が知られていたことも知らない頼りない文献を拾っている。iiiは、一般的な(?)見解にすぎず、『三国志』の距離が信用できないとするしっかりした根拠とはなりえない。ivは、古代中国の里単位が変遷し、一里が何mかを確定的に言うことができないことを言っているにすぎない。vは、今から考えようとする末廬国から伊都国に到る行路のことを言っている。その成否は以下で議論する。ともかく、AIの回答は、『三国志』の距離が信用できないとする学的にしっかりした根拠を挙げることができないことを証言している。

さらに探索を続けて調べても、見つかる一番の根拠らしい根拠は、昔の中国では1里 $\approx$ 400mだったという通説(?)しかない。もう一度GoogleのAIに1里 $\approx$ 400mは科学的に検証されているか尋ねてみると、次のように答えた。

魏の時代の「里」が現代の約400mに相当するという説

は、歴史学的な解釈や資料の分析に基づいたものであり、厳密な意味での科学的な検証ではないです。これは、当時の尺貫法（歩数と距離の関係）や「魏志倭人伝」の記述を元に、1里がおよそ400mであるという推測がなされたためです。

世の人たちが頼りにするAIの回答は、1里 $\approx$ 400mを根拠として学問的な議論をしてはいけない、と教えているのだ。1里 $\approx$ 400mだとするととんでもないことになることは、すでに『日本古代史像の転換』でいくつもの中国史書を挙げて論じた。この考察では、注意をほかにそらさず、『三国志』から1里が何mかを算出しよう。地図ⅠとⅡが明示するように、『三国志』は十分に信頼できる地図の作成を許す、すなわち、距離の原理に忠実なのだから、基底には確かな単位長さがあるにちがいない。

Google mapの韓半島の地図で測ると、海に限られた東西方向の最大距離は約290km、帶方郡の郡庁があった漢城(現代のソウル付近)の南から海峡部海岸までの距離は約330kmである(有効数字を二桁として)。現代の精密な地図から求めた距離数は、実測値と考えてよい。上の二つの距離を、『三国志』は有効数字一桁で4000里と表現しているのである。いったん290kmと330kmを有効数字一桁で300kmと表現しておいて1里をメートルに換算すると、 $300000/4000 \approx 75\text{m}$ が得られる。個別に換算して先頭の二桁だけの数字を拾うと、290kmから1里 $\approx$ 72m、330kmから1里 $\approx$ 82mが得られる

（著書『日本古代史像の転換』の 56 ページで、100 里を m に換算しているつもりで 7.2km、8.2km と書くミスを犯していました。なんとかつな！）。したがって、魏の時代の単位 1 里をメートルに換算すれば、75m 前後となる。ここでは、有効数字が 1 桁ということを意識しながら幅をもたせて、1 里は 70～80m と表現しておこう。

現代の精密な地図を用いて海によって確実に限定される長い距離に対して得られた 1 里 $\approx$ 70～80m（75m 前後）は、ほかの場所の距離を読み取るとき、検証されていない 1 里 $\approx$ 400m という通説よりも、有効に機能するはずである。

iii. 詳細な読解 1

それでは、『三国志』の行路記事のうちまだ読み取ってなかった文力の、「（末盧国から）東南陸行五百里にして、伊都国に到る」にとりかかろう。先ほどの AI の回答にあった v の言い分を検証できるだろう。

末盧国が松浦半島の地域を指すというのは共通認識となっている。壱岐から南方に最短の陸地だから妥当だろう。その上、「末盧」という地名は現代の地名「松浦」と発音がよく似ている。この場合、地名をもう一つの根拠とするのは有効だろう。魏使のなかの踏査隊が上陸したのは松浦半島北部の港と考えてよい。一行が内陸へ向かうとすれば南の方向である。地図を見れば、一番開けたところは現代の唐津市中心

部だから、道行きは東南方向ということになるだろう。

その地域の拡大地図を見ながら進んでみよう。現代の上空からの写真を見ても道はすぐ山路にかかる。前に行く人の姿が見えなかったという文は現場の表現として許されるだろう。唐津市中心部の海岸に沿う道も東南方向に向かう。問題は、松浦川を越えてどの方向へ向かうかである。ところが、「郡使が往來するとき常に駐^{とど}まる所」と書く文が、伊都国が海岸部にあることを教える。なぜなら、魏使一行は船で対馬国→一大国→末盧国と来たのだから、伊都国に船の停泊地があるに違いない。踏査隊がまだ先に進むのなら、海岸部の虹ノ松原沿いにおおよそ東に向かうことになる（もし、背振山系の南側を進む道をとって東南に進むのなら、船の停泊地は唐津市中心部の港になっただろう）。虹ノ松原の東端部まで来たら、背振山系によって北側に押し上げられた海岸沿いの道に進むことになる。その道はしだいに北寄りに傾きながら東へ伸びて、その先に現在の糸島市中心部がある。糸島市は昔は怡土郡と志摩郡で構成されていたが、伊都国の名はその「怡土^{いと}」という地名とつながりがある、と考えてよいだろう。

そういうわけで、伊都国が現在の糸島市にあったという読解に異論を唱える人はまずいない。Google map は距離を測る便利なツールをもっているから、試みに、そのツールを用いて、松浦半島北端部の良港呼子あたりを起点にして、上で述べた道を折れ線でたどりながら糸島市役所まで行く距離

を測ってみよう。その距離は約 39km である。1 里 $\approx$ 70 $\sim$ 80 m (75m 前後) で換算すると、おおよそ 500 里に当る。『三国志』が言うとおりで。

伊都国は糸島市西部の市役所あたりにあったことになる。その地域は、東へ入り込んだ唐津湾の奥の平地である。その場所は、船を停泊できて、一大率を統率する王がいると書かれた記述によく適合する（先ほどの第Ⅱ節（三）に加えた註からすると、魏の帯方郡攻略は山東半島南岸域からおおよそ 400km もある広い黄海を渡って行われたのだから、直航できる速くて大きな“フリゲート艦”があったと推測できる。伊都国にはそのような船が停泊できる良い港があったと考えなければいけない）。

さて、現代の地図を見ると、松浦半島北端部から糸島市への道行きはたしかに折れ曲がっていて、糸島市は松浦半島の東南にはなくてほぼ東方にある。それが、『三国志』の書く方角は当てにならないという人の言い分である。その人たちは、「東南陸行五百里」を杓子定規に五百里のあいだ東南方向に進んだ、と読もうとするのである。落ち着いて考えてみれば、踏査隊の一行が開けた唐津市中心部に出てみれば、そこから唐津湾の東方に糸島市が見える。逆に、到着した糸島市から唐津湾の西方に通ってきた唐津が見える。彼らは、伊都国が末盧国の東方にあることがよく分かっていたはずである。船に乗っていた正使たちも、松浦半島の東に出れば、（案内人から聞いて）東方を目視し、目的地が東方にあることを知ったのである。つまり、魏人たちは、末盧国の東方に

目指してきた伊都国があることをじゅうじゅう承知したのである。それでも、魏人たちは「東南陸行五百里 到伊都国」と書いた。それは漢文の流儀なのだ。

現実の道は、地形に押されてたいい折れ曲がり湾曲する。山がちな日本列島では自然に曲がりくねるし、中国のように広い平野のある所でも条件の良い場所に町ができると道は交叉して折れ曲がる。古代、40km もまっすぐに続く道路はあまりなかっただろう。『三国志』の方角は当てにならないという人たちはそういうことを無視するのである。

われわれは、机上で小さな地図を見ながら頭のなかで考えるのではなく、魏の踏査隊の一員になったつもりで、脳のなかのニューロンを働かせて地図イメージを構成するように努めた。先ほど地図を拡大してマウスで道をたどりながら距離を見積もったのは、そういう方法なのである。そのやり方で、松浦半島の北端部から東南方向へ向かい五百里進めという指示に従ったら、地形が限定する道を道なりに海岸沿いに進んで糸島市に到達した。簡潔な漢文の方角指示はたしかに不十分だが、「東夷伝」を簡略に記すという書籍の要請の範囲で、方角と距離の記述はまずまず適格だったのである。

『三国志』の記述に従って伊都国に到着した。伊都国の王がどこにいたかまで精確には特定できないが、地図Ⅱの縮尺でそれは問題にならない。末盧国から伊都国まで 500 里進ん

だから、帶方郡から女王国に至る総里程 12000 里の残りはあと 1500 里ということになる。伊都国の場所を見つけるために拡大した地図を縮小すると、到着したあたりはおおよそ点に近づく。そこを中心に残りの距離半径 1500 里の円を赤色で描いたら、地図Ⅱが得られる。女王国はこの円内にあるはずなのだ。こうして、地図Ⅱは、女王国が九州島内にあった、と明確に教える。赤い円内に現在の佐賀県や長崎県が含まれるが、誰もが背振山系の北側を進んだと判断するし、卑弥呼は女王国の端の方にいたのではないだろうから、女王の都は福岡県にあったとしてよい。

キ、ク、コの文がそれを語っているのだが、地図Ⅱを見れば、キとクに出る二つの 100 里が上の結論を揺るがす力をもたないことは明白である。正確さをめざすあまり、ここまでの議論はすでに長くなっている。これ以上の細部の議論は省略しよう。著書『日本古代史像の転換』を見てほしい。

しかしまだ、ケの文「南、投馬国に至る水行二十日」の読解が残っていた。長い日程を記すケは無視してよい文ではない。でも、ここまで行路を里程で記してきたのに、なぜここで日程に変えたのだろうか。「水行二十日」がどんな距離かを考えなければいけない。

船で一日にどのくらいの距離を進めるかを記した古い文献は少ないようだ。個人の紀行文や史書を含む役所の文書類ぐらいしかないのだろう。

参考：Google AI は、運用を正式に始めたが、この前までの文から変化している。江戸時代に大阪から江戸まで（およそ 700km）何日かかったかという質問に、以前は、初期には 1 か月近く、後半期に平均 12 日ぐらいと書いていたのに、今日の回答は、平均 5 日となっている（こちらは情報の多い幕末ころの記録を参照したのだろう）。下関から大阪まで（およそ 400km）を、江戸時代後期に平均 12 日から最速 5 日程度と回答するようになった（ここの詳細には、大阪－江戸間を初期に平均 30 日ほど後期に平均 12 日程度と書いている）。AI はまだ整合的な探索に至っていないと考えられる。遣唐使の船が寧波まで（およそ 1000 km）を 10 日以内で着いたということが書かれている。こういうわけで、AI は、「水行二十日」がどのくらいの距離かしっかりした回答を与えてくれない。

それでもわたしは、つたない方法でも「水行二十日」がどのくらいの距離か考えてみたい。昔の人は 1 日に 30～40km は歩いたものらしい。「水行二十日」が倭人が櫓でこぐ船で行く日程だとしてみよう。控えめに考えてその船は人が歩くのよりも遅くて仮に 1 日に 20～25km 進むとしてみると、20 日行くとおよそ 400～500km である。再び Google map のツールで、博多湾から東回りで海岸沿いを宮崎市あたりまでいく距離を測ると 430km ぐらいである。糸島市から西回りで海岸沿いを航行して鹿児島市まで行くのにおよそ 470km ぐらい。上の見積りで二十日間水行すると、宮崎県南部から鹿児島県に達する。九州南部のその地域を、地図Ⅱの赤い円か

ら見て大雑把に南にある、と表現するのを間違いと責めてはいけないだろう。すなわち、ケの文「南、投馬国に至る水行二十日」は、意味をむすぶことができる。

ケの文はまじめに検討するに値する。しかし、投馬国に行くこの水行を女王国に行く行路に加えてはいけない。なぜなら、スの文が、帯方郡から女王国までの行路を、「郡より女王国に至る万二千余里」と総括しているのだから。伊都国まで来るのにすでに 10500 里を進んだのである。上での考察からして、伊都国あたりから投馬国への日程「水行二十日」は、どう考えても、残りの距離 1500 里をはるかに超えてしまうから、水行二十日を総里程に加えてはいけないのである。

実際、文中に、「水行二十日」以外に、行路途上のことは何一つ語られない。むしろ、魏人はそこまで行かなかったから、里程を書かなかったと理解したほうがよいだろう。おそらく伝聞情報なのだろう。ケの文は、南にあるという戸数 5 万もある投馬国のことを一つの地理情報として記述している、と受けとめる方が合理的である。

こういう理解に対して、邪馬壹国が奈良盆地にあったと考える人は、ケの文を、魏使がそこまで行った証拠としようとする。「水行二十日」したなら、博多湾から大阪湾までの約 550km を行くことができる、と考えるのである。ただし、南を東と読み替えて！ しかし、1 里が 70～80m ぐらいとする

と、約 550km は七千里を超えてしまう。それでは、伊都国までの距離 10500 里に 7000 里を加えて、総里程 12000 里をはるかに超えてしまう。その解釈は許されない。多くの論者の主張する 1 里 $\approx$ 400m とすると、総里程 12000 里は 4800km にもなって途方もないことになる。ケとコの文で「南」を「東」に読み替えて邪馬壹国を奈良盆地にもっていこうとする解釈は、にっちもさっちもいなくなる。“邪馬台国”奈良盆地説は、ケの文もコの文も合理的に解釈できないのである。だから結局、“邪馬台国”奈良盆地説は、『三国志』の記述は方角だけでなく距離も信用できない、と宣言するほかないのである。一つの歴史文献を読んで、そこに書かれている距離も方角も信用できないとして、その文献が提示する国がどこにあったか議論することがいったい可能だろうか。

iv. 詳細な読解 2

ここまで議論すれば、ケの文の解釈はかたづいた、と言ってよい。読解作業がまだ残っているのはコの文である。

この文を正確に読み取るには、文脈のなかに置いて見るのが役立つ。コの文を前後のケとスの文と並べると次のようになる。

ケ. 南、投馬国に至る水行二十日。

コ. 南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日
陸行一月。

ス。郡より女王国に至る万二千余里。

まず、ケとコの文が、対連（対句）の形式で表現されていることに気づく。古代中国の知識人である書き手が好む文体を採用したのである。それが外国の読み手をとまどわせることになる。ケは投馬国に至る日程を表わし、コは邪馬壹国に至る日程を表わす。ところが二つの文は、単純に方角と日程だけを表現しているのではなく、たくさんのエピソード記憶を含んで、文の区切りや段落など明確でない古代の書記法で書かれた長い文章中に置かれている。だから、ケとコの文が文脈全体のなかで何を言いたいのかが不明瞭になって、読み手に裁量を許すことになる。

ケの文は不弥国のすぐあとに続くから、その出発地は不弥国のあたりと考えるのは自然である。上ではそのように解して読んで、不備は見つからなかった。

しかし、コの文が投馬国の記述に続くからといって、出発地が投馬国と判断するのは早計である。上ですでに、ケの文の日程「水行二十日」を邪馬壹国への行路の里程に加えては全体の読解が破綻することを示した。まして、「水行二十日」に加えて日程「水行十日、陸行一月」も邪馬壹国への行路の里程に加えたら、再論する必要もないほど、もっとひどいことになる。

コに現われる邪馬壹国は、倭国について記述する『三国志』

「魏書 倭人の条」の最重要な中心国である。現代流の書記法だと段落を改めたいところだ。魏使がその邪馬壹国に行く日程を書くとしたら、自分の出発した帯方郡からの日程を示すのが自然である。ところが、一言「郡より」という言葉を省いたせいで読み方を間違える人が出るのだ。実際、邪馬壹国までの総里程を記すスの文には、きちんと「郡より」という言葉が示してある。

上に掲げた三つの文をよく眺めると、コ^の文がス^の文とも対連をなすことが判る。コ^の文は邪馬壹国までの行路を日程で表現し、ス^の文が里程で表現している。ケとコ^のが対連をなすと見なして「水行十日、陸行一月」が投馬国から邪馬壹国への日程を表現しているする読解が矛盾をはらむことが判ったから、こんどは、コ^の文とス^の文が対連をなすとする見方で読んでみよう。

その場合、コ^の文が、ス^の文のように出発地を帯方郡として合理的に理解できるかが問題となる。それを検証するには、帯方郡から伊都国までの海路の距離を知らなければならない。「水行十日、陸行一月」の文は、行路記述にあるイ^の文、「郡より倭に至るには、海岸に^{したが}循^てって水行し、韓国を^へ歴^て、^{あるい}乍^{あるい}は南し乍^{あるい}は東し、その北岸狗邪韓国に到る七千余里」に対応している。この文を、「いったん海岸沿いに進み、どこかで上陸して韓国内を陸行する」と読むのは、当たらないだろう。船に乗った正使はそのまま海上に行くのが順当である。それに対し、陸を進む一隊がわざわざいったん船に乗り、ど

こかで上陸して陸行したと考えるのは、常識に反する。陸上部隊にはそれなりの装備が必要である。つまり、魏使一行は二手に分かれて、一方は水行し他方は陸行したのである。ただし、海峡を渡るには船しかないから、水行した船は陸行した一隊を乗せるために北岸狗邪韓国に寄ったと考えるのが順当だろう。

その日程が何日になるかを考えるには、それぞれの距離を知らなければならない。帶方郡庁のあった漢城（ソウル付近）近くの海岸から伊都国の港までの距離を、Google map のツールで折れ線で描いて測って見たら、 $1 \times 10^3 \text{ km}$ ぐらいある。江戸時代後半に大阪から江戸までの $7 \times 10^2 \text{ km}$ の海路を 12 日、末期には 5 日ぐらいかかったという話と比べると、概数「水行十日」を承認してよいだろう。魏には優秀な船があり熟練した船乗りがいたという先の想定は正しかった、と言える。陸路を数字で表わすのは、海峡部分をどう計上するかも関係して、やっかいである。粗くても見積もるために、スの文の「万二千里」に 1 里 $\approx 75 \text{ m}$ をかけて推定すると、 $9 \times 10^2 \text{ km}$ になる。江戸時代に東海道 53 次 492km をゆっくり旅するのに 15 日かかったことを考えると、「陸行一月」は長くかかりすぎかもしれない。しかし、陸上を進んだ一行は、踏査しながら距離を測り道々のようすを記録したことからすると、概数で一月近くかかったという表現はまんざら誤っているのではない。

今した距離と日程についての考察は、邪馬壹国が奈良盆地にあったとするために、「水行二十日」や「水行十日、陸行一月」を、邪馬壹国への行路に含めることの無理を明らかにしている。

こうして、コトスの文が、行路記事全体のなかで最も大事な、帯方郡から邪馬壹国までの距離を記述していることが判明した。コトスの二つの文は、アとイで始まる帯方郡からの出発から邪馬壹国の女王の都に到着するまでの行路を、律義に日程と里程の両方で示し、行路記述の全体をしめくくっているのである。

ケの文は、倭国の主要地域の南方に、戸数5万戸もある大国があることに触れる挿入文である。そして、サの文には、21の諸国の国名と正副の首長の官名が連ねてある。邪馬壹国とともに魏に使訳を通じる三十国ばかりの諸国だろう。邪馬壹国とそれらの諸国は、友好国として連合していると思なすことができる。『三国志』が女王国と呼ぶとき、邪馬壹国を盟主とする連合を指している可能性が高い。イの狗邪韓国からサまでが一体的な倭人の国で、魏はそれらの地域を倭国と呼び、女王卑弥呼に「親魏倭王」の金印を授けたと考えることができる。

21 諸国の記述の最後で「・・・次に奴国あり。これ女王(国)の境界の尽くる所なり」と言ったあとに続くシの文「その南に狗奴国あり。男子を王となす。…女王に属せず」は、狗

奴国が、邪馬壹国の女王を盟主とする連合に服さない敵対国だと告げている。狗奴国が女王国の南にあるという地理記述は、軍事顧問団として帯方郡から派遣された魏使が確認したことと考えなければならない。ここでも、方角「南」は信頼できるのである。

倭人の住む全域と周辺の地理の記述は、セとソの文で終わる。セの文は物足りないし、ソの文はおそらく伝聞を記したものと考えられる。ソの文の信頼度は落ちるだろう。

それでも、倭人の居住域全域の地理の記述は終わったと考えて、最終的に、夕の文「倭の地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、あるいは絶えあるいは連なり、周旋(すると)五千余里ばかり」が置かれる。この文は、郡から女王国に至るまでの距離 12000 里のうち、韓国内での行路 7000 里を引いた距離 5000 里が倭地であることを確認して、ダメ押しをしているのである。

以上の読解を背後に含んで現代の精密な地図上で表現したのが地図Ⅱである。地図Ⅱは、『三国志』「魏書 東夷伝」の地理記述が、現実の地形で幾何学的関係を整合的に再現する力をもつことを、あらためて証明している。『三国志』の書く距離や方角は信頼できないという批判は否定された。それは、「ためにする」言い分だったということになる。そう主張すれば、『三国志』の書く距離や方角を無視することができて、論者の思うままの場所に邪馬壹国をもっていくこと

ができる。しかし、地図の原理を無視するそういう読み方をし、位置も確かには言えない国々の国名だけは使って恣意的に倭国を構成することは許されるだろうか。それが学問的に意味をもつ倭国史だと言えるだろうか。

第Ⅳ節 いわゆる邪馬台国近畿説は成り立たない

以上の第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ節は、——『三国志』「魏書 烏丸鮮卑東夷伝」が、倭国の中心国である邪馬壹国は九州島にある——と書いていることを論証した。

したがって、いわゆる邪馬台国が近畿地方の奈良盆地にあったという説は成立できない。

倭国や邪馬壹国の文字の現われない資料を用いて、中国史書にしか登場しない倭国や邪馬壹国のことを論じるのは禁じ手である。もし当時の奈良盆地に邪馬壹国に匹敵する国があったことが明らかになれば、それを、倭国や邪馬壹国という文字を使わずに議論すればよいのである。それが、学問的な研究法というものだ。

事態ははっきりした。魏の時代の倭国や邪馬壹国の地理を主題とするこの考察では、これ以上異説に対する批判を続けるのは控えよう。詳細は、著書『日本古代史像の転換』にゆだねる。

いまだに『三国志』に書かれている邪馬壹国を“邪馬台国”と呼ぶ習慣が続いているが、この際それをやめなければならない。“邪馬台国”を使う人たちは、『後漢書』が女王卑弥呼の国を「邪馬臺国」と表記するのに倣っている。後漢は魏の前代の王朝だから、その呼び方を使用するのがよいと考えるからだろう。しかし、『後漢書』は、魏の次の王朝である晋（西晋・東晋）のあとに成立した南朝宋の時代に編集された。その『後漢書』に基づいて魏の時代の「邪

馬壹国」を「邪馬臺国」と表記するのは歴史学の方法として適切でないことは、ずいぶん以前に、古田武彦著『「邪馬台国」はなかった』が指摘している。

ところで、去年わたしは、漢和辞典に、——漢字「台」は「怡」の源字であり、早くから「台」は「臺」と混用されるようになった、——と書かれていることに気づいた。つまり、「台＝怡」の発音は「yi」だったが、次第に「臺」と「台」は「tai」と「yi」の両方で発音されるようになったということである（現代中国でも同様）。すると、南朝宋代に編集された『後漢書』では、「邪馬臺国」と書いて「yamayi」と読んでいた可能性がある。ところで、現代手に入る『後漢書』は、注釈書『三国志』と同様、唐王朝の時代に編集された注釈書『後漢書』であるが、唐代に加えられた註は「邪馬臺国」の文字が現われる箇所「案ずるに今の名邪摩惟は音の訛なり」と書く。「邪摩惟」は「yamawi」と発音するから、昔の発音「yi」が「wi」に変化したと考えているのである。『後漢書』の書く「邪馬臺国」が「yamayi」と読まれていた可能性が高い。それなのに、常用漢字「台」を用い「邪馬台国」と表記して「yamatai」と発音するのは、混乱をいっそう増す。

ここにカントの次の言葉を引用する意味があるだろう。

——勝手に構想した単なる理念から、この理念に対応する対象そのものの現実的存在を無理やりに引き出そうとするのは、まったく不自然なことであり煩わしい学派的論議の蒸し返しにすぎない。——

第Ⅴ節 倭国の地理に時間軸を加える議論

第Ⅲ節では、東夷の国々のうち二つの国に触れなかった。そこには、「夫余という国が長城の北にあり、玄菟郡から一千里の距離にあつて、南は高句麗と接し、…、その範囲はほぼ二千里、戸数は八万、…」、「高句麗は、遼東郡の東一千里にあつて、南は朝鮮・濊貊と、東は沃沮と、北は夫余と接している。…、その範囲は二千里ばかり、戸数は三万、…」という地理の記述がある。

この記述は、戸数八万の夫余の広さが二千里（おそらく方二千里の意味）、高句麗が戸数 3 万で広さが二千里だとしている。邪馬壹国よりもわずかながら戸数の多い夫余国の広さが二千里という記述は、邪馬壹国の規模を推定するのに役立つ。先ほどの読解では、末盧国から女王国までがちょうど二千里だった。『三国志』は、倭国の中心部の広さがほぼ夫余国の広さに等しいと書いているのである。

『三国志』『魏書 東夷伝』の記述だけではこれ以上議論を深めることができない。だが、魏の前代の後漢の時代の歴史を書いた『後漢書』にも、夫余と高句麗が登場する。そこで、時間軸をさかのぼって『後漢書』を読んでみよう。すると、要約して次のようなことが書かれている。

夫余は玄菟郡（後漢の行政区）の北方千里にあり、南の高句麗と接している。地方二千里。AD49 年に扶余王が使節を送ってきたので天子は厚く報い、AD120 年には跡継

ぎの息子が都の宮殿に来て貢物を献上したので印綬金彩を授けた。136 年には扶余王自ら都に来了。(その一方で) 夫余王の軍 2 万人が玄菟郡に侵入したので、玄菟郡の太守がこれを撃破した。――

高句麗は、遼東の東千里に在り、…、北は夫余と接す。地方二千里、…。夫余の別種となす、…。(「新」王朝の) 王莽が「王」とした、…。(後漢初代皇帝光武の) 建武八年(AD32 年)、高句麗が遣使朝貢してきたので、その王号を復活した。――

『後漢書』のこれらの文が示す夫余国と高句麗の地理は、『三国志』の記述と一致する。『三国志』よりもあとに編集された『後漢書』が『三国志』の文を引き写したのでないことは、夫余王が金印を授かったや、高句麗は(金印をもらわなかったが) 王の称号を認可されたなど、注目すべき語句が証言している。

地理のことを先に言えば、夫余と高句麗の位置や広さが同じ数字で表わされていることが知られる。つまり、『三国志』と『後漢書』は同じ里単位を用いている。後漢と後漢から禅譲を受けて政府を引き継いだ魏が同一の里単位を使うのはごく自然である(この点は『日本古代史像の転換』で強調が足りなかったけれども、『三国志』の使う里単位が、魏・晋・宋・齊・梁・陳を通して使われたということを、それらの史書の地理記述をみな検討して論証した)。

上の二つの文は、倭国の歴史に踏み込むとさらに重大である。簡単に触れておこう。福岡市博多湾沖に浮かぶ志賀島で発見された金印のことは誰もが知っている。その金印「漢委奴國王」のことは、『後漢書』の「伝」ではなく「本紀」に、「建武中元二年(AD57 年)、倭奴國^{みつぎ}貢^{ちやうが}を奉じて朝賀す。…。光武^{たま}賜^{いんじゆ}うに印綬を以てす」と書かれている。これから、金印に書かれている「委」は同音の「倭」の当て字で、その国は現代の当用漢字で書けば「倭奴国」である。

この記事を上二つの文と対照して考えれば、漢を復興した光武帝が、東夷の国から都まで朝貢してきたのを喜んで、倭奴国の王と夫余国の王に金印を授けたことが判る。倭奴国は、後漢の玄菟郡に侵入するほどの力をもつ夫余国に匹敵すると認定されたのである。それに対して高句麗は、王と称することを許されたものの金印はもらえなかった。この事情は、『後漢書』と『三国志』の記述から推測することができる。夫余は方 2000 里の地で戸数が 8 万ある。高句麗の方は、土地は方 2000 里あるものの、『後漢書』には戸数も書かれず『三国志』になってやっと戸数 3 万である。実力の差がその記述に現われている。のちに大国になる高句麗はまだ発展途上にあったのである。これに対して『三国志』は、倭国の中心部の広がり方が 2000 里、中心国邪馬壹国の戸数は 7 万あると書く。金印をもらったことからしても、倭国は後漢の時代にすでに夫余国に匹敵すると認定できる力をもっていたと

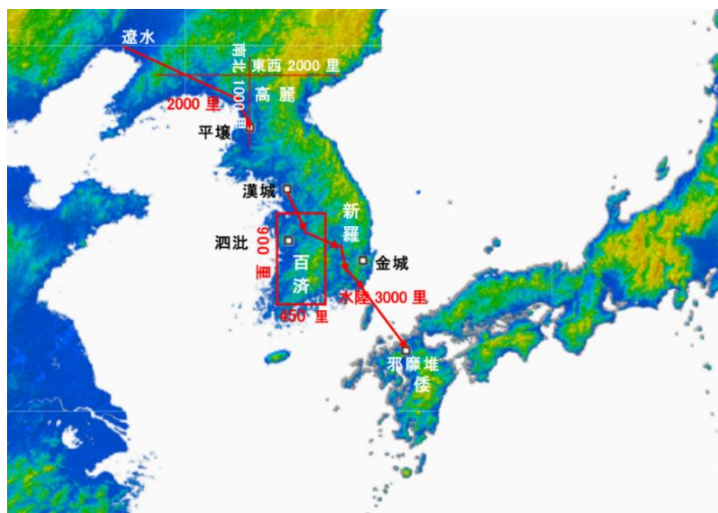
推定できる。

時間軸を加えて歴史に踏み込むと説明が長くなる。倭国に使者を送らなかった中国南朝の宋・齊・梁・陳代のことは省略しよう。ただ、夫余や高句麗の地域で高句麗が強大になっていったように、時代に連れて諸国の勢力が変遷したことが判る。高句麗に対抗して中国南朝に朝貢した倭国は、南朝の史書では、倭奴国・邪馬壹国の後継国のように記されるから、内部の状況を問わなければ順調に発展したと考えることができる。

地理を考えるのが主題だから、魏使の次に使節を送ってきた隋の時代に移ろう。その時代の倭国については史書『隋書』に記述されている。エッセイのように語りだした記述は、いつのまにかずいぶん長くなった。できる限り緻密に史書を読んで証拠を見つけ出して考察していることは信頼してもらえるだろうから、ここから先は結論だけを示そう。

『隋書』が記述する倭国の地理は、使節が実際に倭国に行ったにしては簡単すぎる。しかし隋使が、中国で“倭国の歩き方”と見なされていた『三国志』「魏書 東夷伝」を読んでいなかったとは考えにくい。隋使裴世清^{はいせいせい}は実際に倭国に至る行路をたどり、自分の脳のニューロンの働きによって地理認識を得て、それを『三国志』の記述に照らし合わせた、と考えてよい。もし、『三国志』の記述と大きく異なっていれば、それを報告書に書かなかったはずがない。そこで、『隋

書』「東夷伝」の倭国の記述を、地図Ⅱでしたように現代の地図に落とし込んで描き、それを地図Ⅱと比較するのは有効な方法だ、とわたしは考える。『隋書』「東夷伝」の倭国の記述に書かれた地理情報を、現実の地形図に書き入れたら地図Ⅲが得られる。



地図Ⅲ□周・隋の書く東夷の国々の地理

隋は、何度も高麗(高句麗)^{こうらい}征服を試みたが失敗した。その交戦国の地理を知ろうとしなかったはずがない。だから、地図Ⅲに書かれた高麗についての距離は、精確な値に近いと考えてよい。すぐに気づくのは、里単位が、北朝の周や隋になって改定されたということである。このことも特記しておか

なければならない。朝鮮半島を侵略しようとする隋は、高麗の南側韓の地域の地理もよく知っていたとしなければならない。隋の時代には、百済と新羅が韓の地域を東西に二分して占有していた。『三国志』が方 4000 里としていた韓の西半分の百済が、東西 450 里南北 900 里と表現されているから、里単位が 4 倍余り長くなって、4000 里が 900 里になったのである。高麗のところに書いてある直線 2000 里の距離も、およそその比率の距離なのである。

『隋書』は、倭国までの距離について、「倭国は百済・新羅の東南に在り、水陸三千里」と書く。そのあと、『三国志』の記述を引用するように、「大海の中に山島に依って居る。魏の時使訳を中国に通じた、三十余国」と記す。しかし、「夷人は里数を知らず、ただ日をもって計る、その国境東西五月行、南北三月行、各々海に至る、その地勢東が高く西に下る」という書き方は粗雑だし、「都は邪靡堆にあり、すなわち《魏志》のいうところの邪馬臺なり。^{いにしえ}古に云う、楽浪郡境及び帶方郡を去るならびに一万二千里」とする記述にも、筆者の判断が混ざっている、と考えられる。

したがって、『隋書』の不十分な記述をもとに書き入れた倭国までの矢印は、それほど精確ではないかもしれない。しかし、朝鮮半島に侵略しようとしていて、倭国まで使節を派遣した隋は、隋の里単位で倭国までの距離が概算で 3000 里だと考えていたのは間違いないであろう。

ここに付け加えるべき論点がもう一つある。隋は、魏が派遣して以来二度目の使節を 608 年に倭国に派遣した。倭国に來た使節が実地に見聞した地理情報は、『三国志』について『隋書』にも記述された。その箇所を引用しよう。

明年(608 年)、上、文林郎 裴清^{はいせい}を遣わして倭国に使せしむ。百済^{わた}を度り、…、都斯麻^{つしま}国を経る はるかに大海中に在り、また東して一支^{いき}国に至り、また竹斯^{ちくし}国に至る。また東して秦王国に至る、その人 華夏^{かか}に同じ、以って夷洲となすも、疑うらくは明らかにする能^{あた}わず。また十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は、皆な倭に附庸す。

この記述が、壱岐に至るまで『三国志』と同様なのは地理上当然だが、そのあとも『三国志』の地理記述と大きく食い違ふところがないことに注意しなければならない。一支国から竹斯国へはもちろん海を渡って上陸したのである。そのあとの陸行の記述は簡略すぎるが、見逃せない一文がある。

末尾にある「また十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は、皆な倭に附庸す」は、第Ⅲ節 i で注目した『三国志』の文「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり」と同形である。そして、魏の時代に女王国の東の陸地が単に倭種とされていたのが、隋の時代には倭に附庸（従属）するようになったことを記して、歴史の進展を認識している。重要なのは、倭国中心部が壱岐から海を渡って上陸した西の島にあるという地理的關係が変化していない点である。この二つの明解な文を消し去らなければ、現行の日本古代史

パラダイムは成立できないのである。

地図Ⅲには、都の地名を『隋書』の使用文字のままに邪摩堆と書き入れてある。この文字使用は、『隋書』が、『後漢書』の書く「邪馬臺」を「yamatai」と読んで、「邪摩堆」と表記したことを明らかにする。「東夷伝」編集者は、当代の都が後漢の時代の邪馬臺と同一の地域にあると考えていたのだろう。ところが、すでに第Ⅴ節で述べたように、注釈書『後漢書』の唐代に加えられた註は、「邪馬臺」が音の訛りで今の名「邪摩惟」「yamawi」になった、と考えた。その注釈者は、「邪馬臺」を「yamayi」と読んで、『後漢書』のいう「邪馬臺」は『三国志』のいう「邪馬壹」「yamayi」と同じだと考えたことを示唆する。いずれにせよ、隋・唐の時代の人々、当代の倭国の都が後漢や魏の時代とほぼ同一の地域にあった、と考えていた蓋然性が高い。

以上を総合的に判断すると、『隋書』「東夷伝」が、倭国までの距離を、あいまいに水陸 3000 里と書くのは、『三国志』「魏書・東夷伝」の書く 12000 里を参照している可能性が高い。隋から船で直接倭国に行った隋使は距離を精確には把握できなかったのも、そのように見積もったのだろう。そうすると、『隋書』が書く倭国まで 3000 里とする距離は、百済・新羅の地域をじぐざぐに進む行路を勘定に入れたことになる。地図Ⅲでは、その考えを入れて倭国の都までの矢印

を書き入れた。念のために言えば、地図Ⅲで、倭国までの距離 3000 里を、高麗や百済のところに引いた線との比率を守って、仮にまっすぐな直線で描いても、九州島からそれほど離れた土地へ行けないことは明白である。

こうして、この考察は、地図Ⅱと地図Ⅲが示すように、倭国の都は、魏の時代にも隋の時代にも、九州島の北部にあったという結論に導く。

次代の唐の歴史書『旧唐書』もこの結論を支持する。『旧唐書』の判断は、通時的な歴史観を示して明確である。東夷の国々を記述するのに、倭国とは別に項目を立てて「日本国」のことを記述する。その日本国は、700 年代になって唐に使節を送った国として記述されているから、奈良盆地に興って今日まで続いている日本国のことである。一つ前の項で記述する倭国のところでは、冒頭で「倭国は、^{いにしえ}古の倭奴国なり」と書く。『旧唐書』は、歴代の史書が 600 年代後半まで記述した倭国は後漢の時代の倭奴国の後継国だと見なしているのである。そして、700 年代からの日本国のところには、移行の経緯を伝聞によって示し、日本国が倭国から移行した国だという判断を提示している。

そういう判断に基づき、一つの領域を時代の前後で分けて項目別に二つの国家を記述するその大胆な構成は、中国史書でもめずらしいだろう。長い中国の歴史がそういう書き方をもたらしたのだ。歴代の中国史書は、秦帝国以来いくつもの

帝国が興亡をくりかえしたことを記述してきた。そして、東夷伝では、いくつもの地域（夫余・高句麗・その他小地域）からなる領域が競合し、高句麗・百済・新羅を経て、ついに一つの領域国家に統合された歴史を語った。そういう歴史を観てきた知識人が、日本列島についても上のような歴史的な見方を形成し、『旧唐書』がそれを記した、とわたしは思う。

世界史を通観してみても、そのような動的な歴史を経ずに成立した領域国家を見出すのはむずかしい。日本列島が例外だとする考えは幻想である。東北地方が日本国の版図に入っただのは700年以後で、北海道と沖縄は近世に入ってからである。700年以前にも、小地域が競争しながら統合されていった動的な歴史があったにちがいない。

これに反して、現行の日本古代史パラダイムは、非常に単純で固定的な歴史観に立っている。200年代の魏の時代には、すでに奈良盆地の王が九州はもちろん朝鮮半島南岸の倭地まで支配していて金印をもらったとする、いわゆる邪馬台国近畿説は東夷の国々の歴史とかけ離れている。それでは、日本列島の歴史はそれ以来固化していたことになる…。

けれどもその問題は、議論を続けるとさらにこの冊子のページ数を増大させるので、著書『日本古代史像の転換』に任せて、健全な読者の判断にゆだねよう。

むすび

40 年あまり前に一つの地理的な発見をしたことがわたしの脳に火だねを残し、2017 年、三つの弥生遺跡が東西線上に並ぶというもう一つの地理的な発見が脳の神経細胞回路系を発火させた。そのニューロン系は古代史の記憶系と結びついて二三の書物を書かせることになった。今回の考察は、ニューロンの網目にまだくすぶっているその残り火が、愛玩物をもて遊ぶような思索を促してできたものである。しかし思索は、書物に必ず残る不満なところを補うようにさせる。厳密な論理を大切に思うから、どうしても硬い書き方になり、エッセイに近づけようとの最初の目論見は頓挫した。せめて語り方に工夫を凝らしたつもりである。もっともそれが冗長な調子にさせてしまった。最後まで読んでもらえただろうか。

今回わたしの脳を発火させたのは『脳のリズム』という脳神経システム研究の概論だった。その書物は、人の地理的な空間認識が、脳にある莫大な数のニューロン・システムの精妙な働きによってつくりだされることを教えてくれる。その知見を参考にする思索でなるほどそうなのだと思いながら、人の地理・空間認識の精妙さを不思議に思うことしきりであった。そしてまた、脳のリズムが、自分の動きと外界の事物の動きから時間を認識させる精妙さに感嘆しないわけにいかない。わたしの脳は、自分に残された時間があまりないことまで知っている。

2025 年 11 月立冬

海蝶 谷川修